

生じたる名稱にして、従つて漢史の九姓回鶻に相當するものなりと考ふるなり。^⑧

今此等の諸説に對して余輩の管見を述べれば、Oyuzなる語が元來或るトルコ族の名稱にして、其の中に Uiyur をはじめ其の他の諸部を含み、Toquz Oyuzなる語は、この Oyuz が九姓より成立したるが爲に付せられたるものなることは疑無きが如し、先づ Oyuzなる語につきて述べんに、此の語に「姓」の義の存することは事實にして、Radloff 氏のトルコ語方言集には、尙此の義を載せざれども、既に Müller 氏の Uigurica II. S. 35 に見ゆるが如く、Oyusなる形を以て、漢語の姓・種等の對譯に用ゐられ、Pelliot 氏の譯出せる回鶻文佛典大方便佛報恩經^⑨にも同様の義に用ゐらる、Pelliot 氏は突厥碑文の Toquz Oyuzといふは兩語にて九姓の義に外ならずと説き、余輩も亦同様の考を述べたることあれども、然も前に Radloff 氏の論ずる所を引けるが如く、「Oyuzの君長等」もしくは「Oyuzの民」の如き語が碑文中に見ゆるよりすれば、此の語が或る部族の名として用ゐられたるは明らかなると共に、部族の名の上に數詞を冠したるものは、碑文中此の Toquz Oyuzの外にも Otuz Tatar 即ち三十タ、ール (I. E. 14), Toquz Tatar 即ち九タ、ール (I. E. 34), üç Qurigan 即ち三骨利幹 (I. E. 4; II. E. 5) の如きありて、此等の數詞は皆其の團體を構成せる部族の數を表はし、三十姓タ、ール、九姓タ、ール、三姓骨利幹の意に外ならざること何人も疑はざる所なり、若し Toquz Oyuz の Oyuz が姓の義なりとすれば、此等の各々の場合に於てもまた同様に此の語が存して、Otuz oyuz Tatar; Toquz oyuz Tatar; üç oyuz Qurigan 等と記されざる可らざるに、之なきはまた以て Oyuz が部族の名に外ならず、toquz が其の部が構成せる小姓部の數を示せるものなることの反證と見るを得べし。